

藤沢周平

隠し剣孤影抄

文春文庫





文春文庫

192—6

隠し剣孤影抄

定価はカバーに
表示してあります

1983年11月25日 第1刷

1986年2月15日 第5刷

著者 藤沢周平

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 千102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-719206-3

文春文庫

隠し劍孤影抄

藤沢周平

文藝春秋

目次

邪劍竜尾返し	7
臆病劍松風	45
暗殺劍虎ノ眼	81
必死劍鳥刺し	115
隠し劍鬼ノ爪	151
女人劍さざ波	189
悲運劍芦刈り	227
宿命劍鬼走り	263
解説 武蔵野次郎	343

隠し劍孤影抄

邪劍竜尾返し

一

赤倉不動は城下から南に一里半。赤倉山の麓ふもとから二十丁ほど谷に分け入ったところにある。女の足で城下から日帰り出来る場所である。

檜山絃之助は、日暮れに着いてすぐ祈禱を受け、お札をもらうとお籠こもり堂に入った。例年母の矢尾がきてお参りして行くのだが、去年の秋、母が足を痛めて代りに来ると、その後絃之助の役目のようになつた。

不動は春秋の二度、本尊の開帳があり、そのときは城下一円からの参詣客で谷間の道がにぎわう。祈禱を受け、お札を頂くと諸病に効き、靈験あらたかだと信仰されていた。夜籠りということがある者、お参りにきてそのまま一夜をお籠り堂で明かすわけだが、これはとくに祈願することがある者、信仰厚い者のすることのようだった。多くは日帰りである。

母は夜籠りはしたことがないし、絃之助も去年の秋と今年の春と二度きているが、籠るのははじめてだった。

檜山家では、絃之助の父弥一右エ門が三年前に中風で倒れ、床についたままである。夜籠りに加わることを言うと、母は喜んだが、絃之助は単純に一夜を山気の中で過ごしたかったにすぎな

い。そのことに別の色合いが混じったのは昨日のことである。

絃之助は馬廻組に属している。昨日城中の雑談で、絃之助は何気なく不動の夜籠りのことを洩らした。すると同僚の石毛数馬が、妙な笑いを浮かべて絃之助の耳にあることを囁いたのである。それはある種の淫靡な噂だった。絃之助は思わず顔を赤くしたが、それで夜籠りをやめようとは思わなかった。ただ微かに好奇心が動いたのは否定出来ない。お籠り堂に向かったとき、絃之助は石毛が言ったことを思い出していたようである。

お籠り堂に入ると、中はむっと人いきれがするほど混んでいた。正面の御簾の奥に、燈明が二基ともっているだけで、人がいる広間は薄暗かったが、その中に五、六人武家姿の者がいるのが見えた。ここでは武家、町人、百姓の身分を問わず、勝手に籠るものと聞いたが、その通りのようで絃之助はほっとした。

その女に声をかけられたのは、夜になって広間に燭台が持ちこまれ、その光の下でめいめいが持参した喰い物をひろげ、喰べはじめた頃だった。あちこちに酒を持参した者がいるらしく、中には車座になって高声に唄を唱い出す者たちもいて、食事はひどく乱雑で、活気のある空気の中で進んでいた。

絃之助も持参した握り飯を開いた。姉の宇禰が作った握り飯は、中に梅干しが入っているだけで、ひどくそっけない。それを噛みしめていたとき、不意にその女が、背後から声をかけてきたのである。

「いかがですか」

女は絃之助の斜め後にいた。そこからそっと笹の葉に載せたものを押してよこした。きれいに

焼き上げた小鯛だった。小鯛は領国の西の海辺で獲れ、浜の女たちが日ごと城下まで売りにくる。「今朝獲れたものを焼いて来ました。よろしかったら召上がれ」

女は柔かい口調で言った。ふくらみのあるおっとりした声で、その口調の自然さが、絃之助から余分の身構えを取り去るようだった。とは言え、絃之助が相手の美貌に圧倒されていたことは間違いない。女は二十四、五。絃之助と同年ぐらいに見えた。鉄漿をつけた武家方の女である。すなわち人妻だった。

「これはいかいご造作に。では、遠慮なく頂戴つかまつる」

そう言ったが、魚の上で絃之助は手を迷わせた。箸が添えられていない。その様子を見て女が笑った。澄んで、きれいな声だった。

「ごめんなさい。箸はございませんのですよ。でもここではこうして……」

女は無造作に指をのばして魚の肉をむしった。

「こんな風に召上がるようですよ」

「いかにも」

絃之助は急いで自分も魚をむしった。いつの間にか、絃之助は女とむかい合って喰べていた。あたりは高声な話し声や笑い声でざわめいていて、そんな二人の様子に眼をとめた者もないようだった。

絃之助とむき合っても、女は悪く気取る様子もなく、三角に握ったむすびを齧り、魚をむしり、さらに絃之助に漬け物もすすめた。美しい眼をし、少し厚めの小さな口もとに魅力がある女だが、気さくな人柄のようだった。

「ここには、たびたびおいでか」と絃之助は聞いた。

「いいえ、二度目でございます。この春にも参りまして、このように夜籠りをしました」

「ずいぶんと乱雑なものでござるな。それがしははじめてだが……」

「でも飾らないところが、よくはございません？」

女は口を押しあててくすくす笑った。

「ご城下では、こんなわけには参りませんもの」

「いかにも、そのとおりだな」

絃之助は漸くくつろいでくるのを感じた。これは一種の無礼講なのだと思った。そう思っていると、酒を飲んだり、唄を唱ったりしている連中がひどく楽しげに見えてきた。

「なにか、心願の筋があつておいでか？」

「はい」

「それがしは母の代理だ。父が長年病気で臥よせつておりましてな」

話しながら、絃之助は実際そのためだけで夜籠りをしているような神秘的な気持になっていた。谷道を登るときに抱いていた好奇心を、どこかに置き忘れていた。

食事が終ると、お籠り堂の中は次第に静かになって行った。そしてさらに夜が更けると、寺男がやってきて、一基だけ燭台を残し、ほかの灯を消して行った。そのころには、横になっている者の方が多く、身体を起こしている者は少なかった。

「これでは、あとは横になるしかなさそうなの」

絃之助が言うと、女が低い声で笑った。

「そのようでございますね」

だが二人とも横にはならなかった。暗い羽目板に背を凭たれて、絃之助は横にいる女のことを考えていた。家中の者の妻女に違いないが、一人で夜籠りとは大胆なことだと思ったり、しかしよほどの願ねがいごとがあつて、こうしてやってきているのだろうと考へたりした。

なるほど石毛が言ったのは、こういうことなのだな、と思つてもいた。横になっている者は、男もいれば女もいた。つまり雑魚寝ぞごねである。猥たりがましいと言へば、これほど猥たりがましい情景もなかった。だが不思議にそういう感じが薄うすかった。ここが霊場だからだろうと絃之助は思った。横に心惹ひかれるほど美貌の女がいる。女は身動きすれば肩が触れるほど近いところにいる。そのことが気にならないと言へば嘘うそになるが、心がそういうふうふうに動くのを絃之助は戒めていた。女は人妻である。そして絃之助の好奇心はもう十分に満みたされたと言つてもよかつた。奇妙な夜が更けつつあつた。

だが絃之助の判断は、甚はなだ甘あまかつたと言わねばならない。少しずつ人が起たつて外に忍しのび出る氣配に絃之助は気づいていた。また一人、女が外へ出て行つた。続いて男が半身を起たこし、やがてむっくり立ち上がると寝ている人をまたいで出て行つた。影が動くように音を立てなかつた。

「あれは……」

絃之助は身体を傾けて女に囁ささきかけた。

「どこへ参るものですか。外で何かあるらしゅうござるな」

「お月見でございますよ。外は月が明るうござりますから」

女は嘯き返した。それから絃之助の手に、不意に指をからめてきた。

「外へ、お出でになりませんか？」

絃之助は微かに身顫みふるいた。石毛の嘯きと淫かたらな笑いを思い出していた。

赤倉不動は、そこに堂を祀まつったものの眼の確かさを示すような、地形のいい場所にある。狭い谷間の道は、そこまで来ると、かなり広い台地になっている。そこにはじめは不動堂だけを祀ったのであろう。だが参籠する人がふえたので、別にその横にお籠り堂を建てたようだった。お籠り堂の方が、本堂の三倍ぐらひは広い。台地は、この二つの建物を容れて、なお十分の空地を残して広がっていた。

空地は、松や杉の下草を刈り取るだけの手入れを施しているだけだが、昼の間は、その疎まらな樹間から、はるか下の方にひろがる野と城下町が望まれる。そのまま野趣に富んだ庭に見えなくもない。赤倉山は、この台地の背後から急に険しい傾斜になり、頂上へ行く道はさらに細くなる。絃之助は、女の後に従って堂の前の草原を横切ると、その先の樹立の道に入った。しばらくの間、足もとに枯草の乾いた音が鳴った。樹の枝の間から、地上に月の光が射しこんでいる。

樹間を抜けると、そこは台地の外れで、青白い月の光が、台地の下にひろがる山を照らしているのが見えた。暗い谷間の東側の斜面はそのまま暗くそば立ち、西側の斜面は昼のように明るい。その麓に野のひろがり顔かほをのぞかせていたが、町は白い霧もやのようなものに包まれて、所在が明らかでなかった。

「ごらんになりました？」

振りむいて、女が言った。月に照らされた女の顔には、奇妙な笑いが浮かんでいる。絃之助は、

こくりと喉を鳴らした。

月の光が射す樹の根のあたり、樹間のひと塊りの芒の陰のあたりに、幾組とも数が知れない男女がむつみ合う姿を見ている。中にはあらわに声をあげている女もいた。不思議に猥らな感じがしなかったのは、あまりに明るい月のせいだろうか。清すがしい月の光と山気がみなぎるこの世ならぬ秘境にいて、男と女が野放図に、ごくあけっぴろげに性の饗宴を繰りひろげているのを見た気もした。そうは言っても、絃之助の頭がさっきから痺れたままなのは事実だった。絃之助は痴呆のように女の顔を見返している。

「ここに籠る男と女は、一夜人里の掟をはなれて、気ままにむつみ合うのだそうです。ご存じありませんでした？」

「……………」

「ほんとうに、この月の光の中で……………」

女は空をふり仰いだ。それから振りむくとすばやく絃之助の手をとって指をからめた。

「あなたさまの子を身籠ったりしたら、どんなにしあわせでしょう」

「……………」

「檜山絃之助さまですね、雲弘流をなさる……………。存じておりましたのよ」

「そなたは？」

絃之助は漸く言ったが、女は静かに首を振った。そして急に力を失ったように、絃之助の胸に倒れこんできた。花のような匂いが絃之助を包んだ。